

①「英語教育の質的向上を目指した実践研究法のデザイン」

東校舎 E 館 E504

代表者: 田中 武夫(山梨大学)
提案者: 藤田 卓郎(福井工業高等専門学校)
河合 創(福井市立大東中学校)
宮崎 直哉(掛川市立北中学校)
永倉 由里(常葉大学部)
酒井 英樹(信州大学)
清水 公男(文京学院大)
高木 亜希子(青山学院大学)
滝沢 雄一(金沢大学)
山岸 律子(白山市立鳥越中学校)
吉田 悠一(松阪市立久保中学校)

様々な要因が複雑に絡む教育実践の中で、教師が抱える問題について深く理解したり、実践上の課題を解決する糸口を模索したりするといった教師による実践研究は、英語教育における実践の質的向上を目指す上で極めて重要である。しかし、これまでの英語教育に関する研究は、実証主義に基づく厳密な研究手法が求められることが多く、教師が研究に取り組む際のハードルを高めてきた。その一方で、教育実践を研究するための手法が十分に整備されていないために、同僚あるいは研究者との間で実践に関する議論を深めることができず、実践知を効率よく構築できていないことも指摘できる。本プロジェクトでは、これまでの実践研究の課題やこれまで提案されてきた研究手法を整理し、実践研究の研究法の可能性を探り、英語教育におけるよりよい実践研究の手法を提案することを目的とする。プロジェクト2年目にあたる昨年度は、本プロジェクトメンバーが実際に実践研究を進める中で、どのような研究方法上の悩みや課題があるのかを、インタビュー形式にて具体的課題を洗い出し、研究方法上の課題の整理を試みた。

プロジェクトの最終年度にあたる本年度は、2年目に洗い出した、実践研究において教師が直面する研究方法上の諸課題に対応した、英語教育における実践研究の研究手法のあり方に関するコツとポイントを提案する。具体的な内容は以下の通り。1) 実践研究とは何か、2) 実践研究の目的は何かテーマをどう決めるか、3) 先行研究のあり方、4) 研究課題に合わせどうデータを収集すべきか、5) 結果の解釈と考察をどうすべきか、6) 研究成果の公表をどう行うべきか、7) 実践研究特有の問題にどう対処すべきか、などである。これから実践研究を始める方も対象に、中部地区英語教育学会の会員が本学会で発表したり、『紀要』に実践研究を論文として投稿したりする際に役立つガイドラインとなるよう、具体的な提案にする予定である。

②「言語習得からみる小中連携の英語指導一文の仕組みへの気づき・音声から文字へ・CLIL」

東校舎E館 E504

代表者： 柏木 賀津子（大阪教育大学）
発表者： 柏木 賀津子（大阪教育大学）
伊藤 由紀子（大阪成蹊大学）
李 静香（大阪教育大学大学院生・大阪市立墨江丘中学校）
村上 加代子（神戸山手短期大学）
山野 有紀（宇都宮大学）
犬塚 章夫（刈谷市立小高原小学校）
安達 理恵（愛知大学）
小林 祐美子（大阪府立今宮高等学校）

本発表は、昨年の課題別研究に引き続き行うもので、プロジェクトの目的は、第二言語習得理論、およびヨーロッパやアジアの英語教育の取組から、EFLにおける日本の小中学校で可能な小中連携の英語指導について研究・実践を行うことである。具体的には、3本の柱として、1) 文構造への気づき、2) 音声から文字への段階的指導、3) CLIL、について国内外の研究を踏まえて実践例を提案する。本プロジェクトは、クラスルームでの実践授業をとおした教材開発や研究を主とする。本年度は集大成で、Anderson (1993) の述べる ACT-R に基づき、“rule to instance”よりも“instance to rule”を優先した実践研究から、意味のある場面からの気づきへの促しを提案する。昨年度までのデータに裏付けされてきた理論的枠組みを、実際の授業に組み立て、ワークショップ形式や授業ビデオで紹介する。

① 文の仕組みへの気づき・音声から文字への指導を取り入れた CLIL ワークショップ (35分)

【柏木・山野・村上】「昆虫の住むところ-CLIL・音と文字指導の統合-」対象：小学校5・6年生

場面1 三つの風景 (Landscape) 絵本の読み聞かせ (Content)

場面2 グループで思考する活動 ギャラリートーク (Communication/Cognition)

場面3 『フェアブル昆虫記』の再話と音声ディクトグロスの活動 (Focus on Form/Community)

場面4 帰納法的な順で、慣れ親しんだ単語での音韻認識指導(モジュール活動として)

- ・場面1では、児童の想像力と既存の知識を引き出しながら form-meaning mapping を行う。
- ・場面2では、学習言語での思考と理解を促すティーチャートークと、分析・創造など高次思考活動を必要とする協同学習の中で児童が学習言語を発話してしていく。同時に Where ～? および、前置詞を使った表現 (It's on/in/under…), 昆虫に関する語彙 (ant, butterfly, head, legs など)。すみかを考えながら、内容理解、分類、分析、創造を行う。
- ・場面3では、担任教諭の強みをいかした学習内容の深化とともに、協同学習でのディクトグロス活動により、児童の文構造への気づきを促す Focus on Form を行う。背景知識の活性化と発展的内容として「フェアブル昆虫記」の内容へと誘う。
- ・場面4では、小学生にとっての「英語の音への気づき」は、意味を伴ったフレーズとしての音声から、単語に含まれるリズム、日本語と異なる音声、さらには単語に含まれる音節やライムの感覚などの音韻単位へと分析的に発達を促していく。本調査では小学生を対象とし、帰納法アプローチに基づく「気づき」を促す音韻意識指導に実践的に取り組んできた。これまでの日本人学習者を対象とした先行研究では、英単語を日本語の音節 (モーラ) で捉える傾向 (アレン, 2010; 津田・高橋, 2014; 池田, 2016) が指摘されてきた。これらの分析からは単語の音声を漠然と聞かせるのではなく、ある

程度明示的な指導の必要性が示唆されている。今回の発表では音節意識に焦点を当て、慣れ親しんだ単語での音節の分解（セグメンティング）指導を行う。「動物たちが住んでいる家を探そう」といった投げかけから、どのような規則で絵カードがグループ分けされているのかをフロアと試行錯誤しながら、音節単位の気づきにつながるような楽しい活動を紹介したい。

② 【犬塚】「卵のバンジージャンプ（CLIL）」 対象：小学校5・6年生（12分）

CLIL ならではの場面からの導入、文脈の中での単語の導入、実験デモを行い、児童に聞かせたり使わせたりする英語を選ぶ大切さについても提案する。「卵のバンジージャンプ」では、1) 教師のインプットの中で自然に語彙に触れさせ、実験材料を渡すときにも、“What do you want?” “I want～.” と使い、グループのメンバーに役割を与えた。2) 実験を成功させるために児童は話し合い、輪ゴムの伸びの計算をして表を完成した（Cognition）、3) 結果報告や比較といった高次の思考スキル（HOTS）を引き出し、SLo Mo を使った映像で思考をサポートした。児童は、場面に密接な表現に触れながら、ジャンプの反動や計算を予想していた。ふりかえりでは、「内容」や「協働」への評価となっていた。

③ 【安達】「ヨーロッパのCLILから日本への応用（地理）」 対象：小学校高学年～中学校入門期（12分）

CLIL 授業の歴史の長いヨーロッパの中でも優れた内容を実施しているイタリアの小学校での授業観察より、日本の英語教育において有益と考えられるCLILの4C（Cognition：思考、Communication：言語、Content：内容、Culture/Community：文化や国際理解／協同学習）を中心に、日本でも可能な地理に関する多様な活動を提案し、その効果と可能性について報告する。まずCLILの利点を紹介後、児童の身近な物を利用した体験的学習（工作、実験）、児童の関心に合った多様な活動、協同学習、異文化への関心を説明し、その上で地理をテーマに、音や身体を使った活動、創造性を高めるラップブックなどの工作、また、背伸びとジャンプの協同学習を利用した言語的活動や工作を使った異文化交流の実践例を提案する。最後に日本の外国語活動におけるCLILの意義を総括する。

④ 【伊藤・李】「感覚器官とUMAMI-CLILと小中連携」 対象：小学校6年生 中学生（12分）

ヒトの感覚器官（目、耳、鼻、口、皮膚など）が受ける刺激や感覚（視覚・聴覚・触覚・味覚・嗅覚）について知り、味覚に焦点を当てて、どの食材がどのような味なのかを考えて、グループで食材カードを4つの味に分類し、5つ目の味であるUMAMIについて考える活動を行った。CLILは様々な校種で取り組まれているが、本指導では小学校と中学校の両方で、視点を少し変えながら同じ活動に取り組み、小学校から中学校へと学びを繋ぐCLILを目指した。発表では公立小学校、中学校での授業の様子と、フィンランドの小学校での授業訪問様子を紹介するとともに、活動の一部を実際に体験するミニ模擬授業を行う。

⑤ 【小林】「CLIL物理・暗示的文法指導から、文法の定着」 対象：高校2年生（12分）

教師が行ったCLIL授業において、英語科教師とALTのチームティーチングでCLIL(理科：物理分野)の授業を行った。暗示的な文法に気づかせる指導を行い、CLILの枠組みを活用して高校生が理科の内容で思考し協働して発表する取組をした。これらの言語活動が文法の定着等にどのような影響が

あるのか検証することを目的とした。対象者は高校2年生160名であり、暗示的文法指導を行った CLIL 群を実践群として(N=80)、明示的文法説明を行った CLIL 群を統制群とした(N=80)。本発表では、授業の流れを実演と映像を使って取組の様子を発表する。

③「英語教育における『エビデンス』:評価と活用」1年目発表

東校舎 E館 E101

司会者: 亙理 陽一(静岡大学)
提案者: 寺沢 拓敬(関西学院大学)
草薙 邦広(広島大学)
浦野 研(北海学園大学)
工藤 洋路(玉川大学)
酒井 英樹(信州大学)

国際的にも国内的にも「エビデンス」に基づいて教育政策が論じられ、学校種に依らず教育実践がその影響を受けるようになって久しい。英語教育も例外ではなく、種々の議論において、文科省やベネッセ教育総合研究所による学習指導要領の実施状況や、学習者の意識・能力に関する調査結果が参照されてきた。しかしその「エビデンス」自体の在り方や実践現場における受容され方の検討は十分に行われてきただろうか。

2015年の和歌山大会シンポジウム(亙理, 2016)にて、無作為抽出で行われた調査であっても、指導要領の改訂を論じる根拠として十分な妥当性を持たない場合があることが指摘された。他方、寺沢(2015)は、小学校英語必修化の根拠に用いられたエビデンスの質がきわめて低いものであったことを明らかにしている。

本研究プロジェクトの目的は、こうした「エビデンス」を学会として批判的に精査し提言をすべく、英語教育研究および教育政策におけるエビデンスの評価モデルを構築することである。同時に、英語教育実践を裏づけるエビデンスのどのようにして得るか、どのように活用するか、その在り方を検討したい。

① 英語教育研究・教育政策における「エビデンス」の現状：エビデンス階層の観点から

亙理陽一(静岡大学)

本報告では、3年間に渡るプロジェクトの概要を示す。一年目の研究として、また続く2報告の導入として、「エビデンス階層」(Oxford Centre for Evidence-based Medicine, 2009)の観点から、例えば学習指導要領改訂の議論において提示されている資料が「エビデンス」としてどのような位置を持つかを検討し、現状と課題を整理する。

② 因果効果を推定するとはどういうことか：小学校英語を事例として

寺沢拓敬(関西学院大学)

本報告では、まずEBM等の用法に準拠して「エビデンス」を「因果効果」と定義する。それを踏まえ、特定の教育プログラム(処遇)が学習者の学力向上(結果)に与える因果効果を、いかにすれば推定できるのか論じる。

事例として小学校英語の効果に関する実証研究をとりあげ、そのほとんどが適切な因果効果の推定に失敗していることを論じる。これは、英語教育学固有の問題でもある。なぜなら、英語教育学者によって伝統的に行われていた手法（たとえば、経験群と統制群の t 検定・分散分析等による単純比較）では、因果効果を推定することはほぼ不可能だからである。医学や経済学、公共政策研究で使われている因果推論のメソドロジーを紹介し、英語教育学への適用可能性を考える。

③ 標準的測定モデルと共通変数の必要性：PK テストを例とした展望

草薙邦広（広島大学）

本報告では、英語教育に関する構成概念について、それらの測定モデルや変数が氾濫していることがエビデンスの創出を阻む一要因であるという認識のもと、英語教育の質向上に資するエビデンスを創出するためには、取り扱う構成概念に対する標準的測定モデルと、その測定に使用される共通変数の設定が必要であると主張する。具体的には、文法の手続き的知識を測定するとして開発された PK テスト（根岸・村越, 2013）を題材として、（a）標準的測定モデルの設定方法、（b）共通変数としての妥当性または公共性の検証方法、（b）我が国の英語教育界における具体的な運用方法、について展望を示したい。